令和元年度　みやき町立中原小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
「心豊かに　たくましく　賢しい風の子」の育成 ～　自信　やさしさ　やる気いっぱい　中原小　～	①　豊かな人間性を育む。（感性豊かな子ども） ②　健康・体力づくりを推進する。（健康でたくましい子ども） ③　確かな学力を育む。（自ら学び考える子ども）

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①豊かな人間性を育む。（感性豊かな子ども）

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育の推進	道徳教育の充実	・本年度の重点項目を決め、全校で「考え、議論する」授業づくりに取り組む。 ・道徳の評価の在り方について検討する。	・一人一人が考え、話し合う授業づくりを行う。 ・本年度の重点項目を決め、全校で道徳的心情・判断力・意欲と態度を育てる。 ・講師を招き、道徳の評価について考える機会を設ける。	B	・各学年で「対話的活動」に取り組んだ。一人一人が意見を持ち、それをもとにペアやグループ、旅行型などの形態で話し合う授業づくりを行った。 ・学年ごとの重点項目を決め、全校で道徳的心情・判断力・意欲と態度を育てることができた。 ・講師を招いて評価の研修会を開くことはできなかった。	・講師を招いて「考え、議論する」道徳や評価に関する研修を行う。 ・来年度の重点項目を全職員に知らせて取り組む。
		読書活動の日常化	・70％以上の児童が、めざせ70冊貸し出しを達成する。 ・ファミリー読書達成率を70％以上にする。	・星取り表や多読賞の表彰をする。めざせ70冊貸し出しを達成した児童の表彰を校長室で校長先生から表彰してもらうことで、児童の読書意欲を高める。読書冊数のめあてをもたせたり、学年おすすめの本10冊を紹介したりして、興味をもたせる。 ・業間休みに、高学年優先貸し出しや朝の読書の時間に貸し出しをして、高学年の貸し出しの時間を確保する。 ・読書週間や月間（6月・夏休み・11月・2月）を設け、読書の習慣化を図り、6月、11月は、保護者と一緒にするファミリー読書カレンダーの取り組みを行い、児童に自分の読書活動を振り返らせる。	B	・70冊貸し出したのは、昨年度は、2学期で190人（達成率548，4％）だったが、2学期で、207人（達成率50，4％）だった。校長室での表彰がもらうのを楽しみしていた。 ・下学年児童は、自分から図書館に行くが、上学年は自分から図書館にくる児童が限定されていた。高学年貸し出し優先を利用している児童もいた。 ・図書バックを置く場所を設置したことで、本を借りて遊びに行き、帰りにバックをとって行く児童もいて、利用が増えた。 ・昨年度より読書月間を土日を2回含んだ読書週間にして短いスパンで取り組んでもらうようにした結果、約70％の家庭で取り組みがあり、昨年度より5％多くなった。 ・親子で読書をする時間をとっている家庭は、まだ少ないが、意識は高まっている。	・図書館の環境整備を心がけ、読書を身近に楽しむ場の提供をする。 ・学年の初めに目標冊数を設定したり、〇冊読んだ児童にミニ賞品を準備したりして読書の意識を高め、読書の量を増やし、幅を広げる。 ・学年おすすめの本10冊を個人カードの裏に貼って紹介し、読んだらシールをはるようにし、全部読んだ児童に賞状を渡す。 ・「希望図書受付ノート」を設置し、児童の希望する図書の情報を得て、選書購入を図る。 ・ファミリー読書への取り組みや方法などを図書館便りで呼びかけ、読書の楽しみ方を伝える。
		交流学習の充実	・年2回のナーミー活動に4年生児童が同じ地域で生活する幅広い人たちと交流し、共生の意識を育てる。 ・中原っ子集会や学年交流会を通して支援学校に通う児童生徒への正しい理解を促す。	・ナーミー活動の目的を道徳や特活の時間を使って価値づけし、学校で学んだことと交流活動を関連づけて指導していく。事後活動として中原っ子集会で感想などを発表する。 ・代表委員会で、中原っ子集会に向けてテーマや活動内容を話し合う。 ・学年交流に向けて、夏季休業中に担当者打ち合わせ会を実施し、活動計画を検討する。	B	・道徳や特活で相手を思いやることの大切さを学び、実際に地域のお年寄りや体の不自由な方と交流したり、ボランティアの方の温かさにふれたりすることができた。 ・「中原っ子集会」・支援学校との交流学習では、夏休みから打ち合わせをし、子供達の意識も高まり、交流が深まった。 ・「中原っ子集会」で4年生がナーミー活動の体験報告をしたが、1クラスしか活動を終えていなかったので、学年の取り組みとして発表するのに苦心した。	・ナーミー活動の期日を検討してもらい、「中原っ子集会」では、学年揃った体験をして発表に臨めるようにしたい。
教育活動	〇人権教育及び特別支援教育の推進	人権意識高揚，人権教育の計画的実践	・「友達の光るところみつけ」を全校で年に5回以上取り組む。 ・全校集会を年間3回行い、人権に関わる話、標語等の取組を通して人権の心を育む。 ・人権・同和教育に関する職員校内研修や、お知らせなどを通して、先生方への意識高揚も図る。	・「登校班の友達」「学級の友達」「そうじの友達」などの視点を示し、友達の良さに目が向くようにする。 ・放送で紹介し、自尊感情を高めることにつなげる。 ・中央階段前に人権コーナーを設置し、いろいろな人権課題への気づきや知識を児童が持てるようにする。 ・人権とは何か、人権が守られるにはどうしたらいいか話す。 ・8月の平和集会、12月の人権集会で、人権意識を高める。 ・夏季休業中にロングの研修、職員会議や連絡会などの折にほんの数分、時間をもらうなどして、様々な人権課題について考えていただく。	B	・「光るところ見つけ」は実施回数や放送での紹介が計画通りに行えなかった。しかし、保護者や児童はその掲示物をよく見ており効果はあった。 ・朝会や集会での話、人権標語、コーナーへの掲示などで人権への意識づけができた。 ・会議の中で、伝えたい話や材料について、時間がない中でそれを優先することが難しく、周知ができなかった。しかし、年度当初の会議での提案や夏季休業中の職員研修、集会の提案等でできた。 ・部落問題学習についても、計画を出しDVDでの教材を提示したものの、実際に取り組むことができなかった。 ・部落史学習や人権課題学習は6年生で取り組むことができた。先生方に公開できたらよかった。	・人権・同和教育は教育活動の全てにおいてなされるものであり、これを大事にすることは学級経営や生徒指導にもつながることを周知する。 ・「光るところ見つけ」や人権標語などは、期限を決めて提案する。 ・光るところの放送については、いつ、だれが、どんな形でするかを共通理解できるよう提案する。 ・部落問題学習は、各学級の道徳に、少なくとも1回は入れてもらうよう、提案し、年間計画に入れてもらう。
		特別支援教育の推進	・「発達障害」の理解を深める。 ・個に応じた指導支援をし、児童の自己肯定感を高め、自信や意欲を持たせる。	・職員に向けて「発達障害の理解と支援」について研修会を行ったり、連絡会で具体的な方策について伝えたりして、発達障害について理解を深める。 ・全校児童に向けて、支援学級の児童理解を目的として、全校朝会で支援学級担任から「なかよし学級」の紹介をする。 ・必要に応じて「障害のある子どもの学校生活支援事業」を活用し、巡回相談員や専門家と連携しながら児童の支援に努める。 ・個別の指導支援計画を作成し、長期目標・短期目標を立て、行動を観察しながら、方策を練っていく。	B	・巡回相談を数回行い、専門的なアドバイスをもらい、複数の職員で実践した。医療機関や関係機関との連携を図り、全職員にもその経緯を伝え、共通理解をした。 ・なかよし学級の紹介は、「人は一人ひとり違いがある」ことを通常学級の児童自身にも話す機会となった。 ・一人の児童にも専門機関の助言を受け、学校体制を整え、多数の職員で対応し、成果を得た。 ・個別の指導計画では、本人理解に時間を要するため作成が後になった。	・特に集団活動に参加するのが苦手な児童や特性のある児童の行事の参加（体育大会等）については、前年度のうちから次年度の指導支援方法について書面に残し、申し送りを徹底する。
	● 志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答える生徒を80％以上にする。	・すべての教科や学校行事を通して、夢をもつことの大切さや、目標を達成した時の自分の成長に気付かせる。 ・特別活動や道徳で、夢や目標について考えさせる時間や場面を設ける。	A	・すべての教科や学校行事を通して、めあてや振り返りを大切にし、児童の頑張りを認め励ますことで、目標を達成した喜びを感じさせ、自分の成長に気付かせることができた。 ・特別活動や道徳で、夢や目標について考えさせる時間や場面を設けたことによって、児童は毎日の目標や将来の夢について考え、実現に向けて頑張ろうという意欲をもつことができた。 ・95％の児童が自分の夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答えた。	・児童の夢や志を実現できるよう、校内研究で授業改善や指導力向上に努め、確かな学力を身に付けさせる。 ・すべての教科や学校行事を通して、大きな夢や目標を達成するために、具体的な目標を立てて児童に取り組ませるようにする。
	●いじめの問題への対応	いじめの早期発見、初期対応	・いじめを積極的に認知し、早期発見、正しい初期対応でいじめ根絶をめざす。	・生活アンケート、いじめアンケートを年間2回実施する。日記等での情報の客観的把握に努める。 ・迅速にいじめ防止対策委員会を立ち上げ、チームでいじめを受けた児童の指導・援助の方策案を立て、サポート体制をつくる。	A	・いじめアンケートや日常の児童観察、生徒指導連絡会を通して早期発見、早期対応に努めた。その結果、早期解決につながっている。 ・いじめ案件については、学年や級外の連絡を密にし、チームで対応することができた。	・複数職員で情報を共有したり、報告したりすることで、早期発見、早期対応をすることが大切である。そのためにも相談しやすい環境づくりを来年度も継続していく。

②健康・体力づくりを推進する。（健康でたくましい子ども）

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体つくりの推進	基本的生活習慣の育成・食育の充実	・早寝、早起き、しっかり朝ごはんの定着を図り、96％の児童が達成する。	・給食指導や食に関する授業において、生活リズムに関する指導を実施する。 ・「朝食振り返りカード」（6・11月）を継続実施し家庭と連携した取組を行う。 ・給食試食会や便りで家庭への啓発を行う。	B	・朝食喫食率は、毎日食べる児童が88.5％であった。 ・生活リズムに関する指導の実施状況は、全校朝会や朝食振り返りアンケート、給食の時間の放送による一斉指導の他に、学級担任より授業や長期休業前の指導等、様々な機会で実施した。	・休日に生活リズムが崩れる児童の増加、朝食を食べない児童が固定されていることが課題である。全体指導をより計画的に実施し、個別に指導を行いたい。また、規則正しい生活については、家庭で定着できるよう、家庭への啓発方法を検討し、次年度も継続して指導を行う。
		健康教育の充実	・保健指導など日常生活に関する授業や保健だよりをとおして、自分自身の健康への関心を高める。	・家庭科や保健をはじめ、健康に関する授業において、栄養教諭や養護教諭による指導を行う。 ・健康診断結果や来室状況をもとに、児童の実態に合わせた資料を作成し、、計画的に保健指導を行う。 ・毎月保健だよりを発行し、家庭へ健康に関する情報を発信していく。 ・委員会活動と連携し、児童の関心を引く保健指導を行う。	B	・生活科や家庭科、保健で栄養教諭や養護教諭とTTの授業を行うことで、専門性を活かした資料等を活用し、児童の理解を深めることができた。 ・身近な物を使用して定期的に掲示物を作成・掲示し、児童の興味・関心を引き付けるようにした。	・職員間で日頃から児童の実態や課題を共有することで、学習内容を検討し、実態に合わせた資料の作成に繋げる。 ・定期的に掲示を張り替えることで、食・健康に関する児童の興味関心を維持できるようにする。
		体力向上の具体的実践	・新体力テストの各学年8種目において、県の平均を8割の種目で上回る。	・スポーツチャレンジの取り組みを通して、運動への意欲を高め、体力の向上をはかる。 ・スポーツテストのやり方について共通理解を図り、公平に行うことができるようにする。 ・外遊びを奨励する。	B	男子は4種目、女子は3種目で県平均を上回っているが、目標である8割には届かなかった。低学年は男女ともに平均を上回る種目が多かったが、高学年になるにつれ、特に女子の結果が芳しくなかった。 ・スポーツテストの実施方法は共通理解を図り、級外の職員の協力のもと行うことができた。 ・ドッジボール大会を委員会主導のもとに行い、全クラス参加することができた。また、縄跳び遊びを計画して、希望者に実施するために活動することができた。	・スポーツチャレンジの取り組みを行う時間が取れず、あまり実施できなかった。縄跳びの時期に大縄に取り組んでもらえるように周知する。 ・外で積極的に毎日遊ぶ児童もいたが、ずっと室内に残る児童もおり、放送、見回り等で声かけをしていく。

教育活動	○安全教育の徹底	防犯教育・交通安全の徹底	・安全指導計画に基づき、危機回避能力を育成する。 ・学校行事や学級指導、各教科と関連させ安全指導を随時行い、実践への意欲付けを行う。	・生活場面に潜む様々な危険を知らせたり、訓練の場面に設定したりして、基本的行動様式として安全な行動について考えさせ、具体的に行動させて理解させる。 ・登下校時や放課後等の交通安全のきまりを設定し、学級や学年でのきまりの徹底と交通安全に対する習慣を図る。 ・安全を守る身近な人々、安全施設などについて理解させ、心情に訴えて意欲を高める。	B	・今年度実施した交通安全教室・不審者避難訓練・風水害避難訓練・火災避難訓練は、今後も反省意見等を検討しながら実施していきたい。 ・登・下校時における班の乱れやあいさつの声の低下等あったので、毎月の下校指導や臨時の登校指導を実施し、教職員の共通理解を図り、児童に交通安全のきまり等の意識向上を図りたい。	・交通教室の中学年の自転車実技のコースを増やし、自転車の数を多くする。 ・不審者避難訓練の日程を水曜日に設定し、児童下校後に教職員の研修をする。 ・風水害避難訓練の事前指導として、共通教材の防災・安全教室のフォルダに入れている動画「急な大雨・雷・竜巻から身を守る」(6分・12分)の資料を見せて、非常時の対処法を知らせる。 ・登校・下校指導の期日の徹底や教職員の共通理解と呼びかけをする。
	○生徒指導の充実	教職員の共通理解・共通実践	・「出会った人にあいさつをする」「トイレのスリッパを並べる」「廊下の右側を静かに歩く」の3つを全校共通のめあてとし、年間を通して指導をする。それぞれのめあてを80%の児童が達成できるようにする。	・「プラス1あいさつ」について児童が各自でめあてをもって取り組んだり振り返ったりできるようにワークシートの工夫を行う。 ・委員会活動と連携し、トイレのスリッパ並べの指導を行う。 ・廊下歩行について指導強化週間を設け、全校で統一した指導を行う。 ・朝会や学級指導の場で、生活場面の具体的な例を挙げて指導をする。 ・指導が必要な事案が発生した場合には、放送等で呼びかけをして全校で共通した指導を行う。	B	・ほとんどの児童はきまりを守り、落ち着いた生活をすることができている。しかし、一部の児童が規範意識が低く、トラブルを起こすことがある。職員から指導を受けているが、なかなか改善しない状況である。 ・生徒指導が必要な事案が発生した時には、事案の内容に応じて学級指導や放送による全体指導を行った。 ・生徒指導連絡会の内容を改善し、生活目標指導の具体化、共通理解を図った。	・「規範意識が著しく低い児童や、複数の児童を同時に指導する場合には、2名以上の職員が対応する。」「必要に応じて、管理職や生徒指導主任も指導にあたる」など、効果的な指導法を話し合う場を生徒指導連絡会で設ける。 ・教育相談との連携を十分に行い、特性を持った児童への支援や、職員間の共通理を迅速に行う。
		指導体制の確立	・指導部会において、生徒指導体制を確立させる。	・全職員の生徒指導力を向上させるため、生徒指導の面からだけでなく、教育相談の視点からも児童の現状を分析し、指導法についての情報を共有する。また、必要に応じて生徒指導研修会を設定する。	B	・児童に充分な支援が行えるように、年度途中に、児童の実態に合わせ、全校で時間割の調整を行った。 ・全職員がチームで生徒指導を行った結果、年度当初に比べると、廊下歩行や下校の仕方がよくなってきた。また、時間を守ろうとする姿が見られるようになった。	・「児童の実態把握をしっかり行う」「引継ぎを確実に行う」「生活目標の具体的な指導を共通理解する」など、「予防的生徒指導」に重点を置いた生徒指導体制を確立する。まずは事が起きないよう、問題が拗れないようにする。
		自己肯定感・自己有用感の育成	・児童が安心して生活できる学校を目指す。	・Q-Uを2回実施し、学級生活満足群にプロットされた児童の割合が高くなるように、結果を学級づくりに活用できるようにする。また、要支援群にプロットされた児童を全職員で支援していく体制をとる。 ・学期に1回のあすなろ会議を実施し、支援を要する児童をチームで支援していくようにする。 ・学級不適応傾向児に関するケース会議を必要に応じて開き、短・長期目標を中心として具体的な計画を立案する。	A	・Q-Uを2回実施し、学級の状態を客観的に見取り、その結果を学級づくりに活用できるように外部講師を招き、職員研修を行った。 ・学期に1回のあすなろ会議を実施し、支援を要する児童の状況を共通理解し、チームで支援していくための方法を確認した。さらに、2週間毎にミニあすなろ会議を実施し、その時々の支援の在り方を考えていった。 ・学級不適応傾向児に関する短・長期目標を設定し、チームで対応することで、別室登校できる児童が増えてきた。	・あすなろ会議・ミニあすなろ会議をより児童の支援に有効活用できるように内容、生かし方を検討していく。

③確かな学力を育む。(自ら学び考える子ども)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	学習規律の徹底	・「学習のきまり」を徹底させる ・相手を意識して、話を聞いたり、話をしたりできる児童の育成	・「学習のきまり」について掲示をし、常時児童に呼びかけ徹底をはかる。 ・聞き方名人「あいうえお」、話し方名人「かきくけこ」などを掲示し、意識を高めさせ、話し方聞き方が上手にできている児童をモデルにし、具体的に示しながら随時指導していく。また、自分がどのくらいできているのか、(「あいうえお」のいくつ…など)随時振り返るようにしていく。	B	・授業始まりと終わりのあいさつを全校で統一したことで、学年が上がっても同じように取り組めた。 ・「対話的な活動」を授業に取り入れることで、友達の意見を聞こうとする態度が身についてきた。しかし、「聞き方名人」「話し方名人」の掲示物を生かしきれていなかったので、随時活用するようにしたい。また、次年度は、相手を意識した話し方ができるよう手立てを考えていきたい。	・次の授業の準備をして、終わりの挨拶をする。 ・低学年の「休み時間の『カツオ』」を全学年で取り組む。 (か・・片づけ、つ・・次の準備、お・・お茶・トイレ) ・話す相手に伝わるような声の大きさや体の向きを考えさせたい。
		基礎基本の確実な習得と活用力の育成	・対話的な活動が活性化するような授業づくりを行い、全員が研究授業に取り組む。	・校内研究会で低・中・高・なかよしの4学年部会より、全体授業研究会を実施し、話し合いたいと思う課題設定の工夫に視点を置き、授業づくりの研修を深める。 ・研究の内容や方法についての共通理解を図り、先進校の事例に学びながら、対話的な活動を活性化させるための手立てを探る。 ・学習の振り返りのさせ方を見直し、自らの学びを自覚させる。	B	・低・中学年部会で公開授業研、高学年・なかよし部会で全体授業研を行い、問題解決的な学習と対話的な活動を視点に授業づくりを行った。その他にも全員がグループ研として研究授業を行い、研修を深めることができた。 ・授業づくりの段階から講師の先生に指導をしていただき、個々の授業力向上に努めた。 ・話し合いたいと思う課題設定の工夫に視点を置き、対話的な活動を取り入れた授業づくりを行ったが、話し合いたいと思う課題設定が難しいと感じた。 ・学習の振り返りの視点をもとに口頭や記述で行った。	・話し合いたいと思う課題設定の工夫のために、対話的な活動が活性化した課題を記録し、ストックしていく。 ・学習の振り返りを何のためにしているのか、目的を明らかにして、自らの学びを自覚させていく必要がある。
		家庭学習習慣の確立	・家庭での学習時間の目標を80%以上の児童が達成できるようにする。(目標時間…低学年30分、3年生40分、4年生50分、5年生60分、6年生70分)	・「家庭学習のすすめ」などを活用して、児童や保護者への啓発を進める。 ・学期に1回家庭学習パワーアップ週間を設け、家庭学習の充実を図る。動機付けにしたり、実態を把握したりするためにカードを作成し、家庭学習の時間や振り返りを記入させるようにする。 ・自主学習を奨励し、自学ノートを記入するときのきまりを提示したり、モデルとなるノートのコピーを掲示したりしながら自主学習の内容の質の向上をめざす。	B	・家庭学習の動機付け、また実態を把握するため、学期に1回家庭学習パワーアップ週間を設けた。毎日の家庭学習の時間を記入させ、それぞれの学年の目標時間を達成できるようにした。学期を重ねる毎に少しずつ家庭学習が伸びてきた。 ・家庭学習パワーアップ週間の取り組みの結果を保護者に戻し、さらに家庭学習が充実するようにした。 ・学年に応じた内容の自学ノートのメニューを作成し、自主学習を奨励した。また、「花丸自学コーナー」を設置したり、学年の自学コーナーを作ったりし、モデルとなるノートのコピーを提示し、自主学習の内容の質の向上を図った。	・家庭学習の内容が充実するような手立てをとっていく。 ・各学年の目標時間に到達する児童が増えるように、手立てを検討していく。 ・家庭教育の充実を図るため、保護者向けの子育てに関する講演会等を企画し、啓発していきたい。
教育活動	○国際化・情報化社会への対応	外国語活動の推進	・コミュニケーションを図り、意欲を高める授業づくりに取り組む。 ・学校生活の中で外国語に触れる機会を作る。	・聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，進んでコミュニケーションを取れる授業づくりを行う。また，異文化や自分の文化に対する理解を深めるために，習慣や言語などの様々な文化の相違点に気づかせる授業を行う。 ・授業では学級担任が中心となり，ALTと連携する。 ・低学年にもALTとコミュニケーションを図る機会を作るために，年に5回は授業を行う。 ・異文化交流を行うために，外国語活動以外の授業にもALTに来てもらい，クラブ活動や委員会活動にも参加してもらう。 ・児童が英語に興味をもち，親しめるように英語での掲示物を作成する。	B	・コミュニケーション活動を中心とした授業にするために、インタビュー活動を取り入れたり、発表の場を設けた授業づくりを行うことができた。ALTの出身国の行事や文化を紹介し、異文化に触れる機会を作ることができた。 ・低学年から年5回外国語に触れる学習を取り入れた。しかし、どの学年でも学級担任とALTが連携するための事前打ち合わせの時間確保ができなかった。 ・ALTに掲示物を作成してもらい、英語に興味がもてるようにした。	・ALTとの事前打ち合わせを確実にするために、学期ごとにどの単元の何時目をする、というのをALTに伝えるようにする。 ・全学年を通して、行事紹介のパワーポイント等は共通で使用できるようにする。 ・ALTに英語を使用して掲示物を作成してもらったが、行事や季節によって、こまめに貼り替えをすると、より興味を持たせることができ、異文化理解にも繋がる。 ・読書週間に合わせて、授業中だけでなく、休み時間にも絵本の読み聞かせをしてもらうと学校行事と関連して活動できる。
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICT利活用の推進	・分かる授業のため，タブレットを積極的に活用し，学習内容の定着を図ったり，学習したことをわかりやすくまとめたりする。 ・情報モラルに関する学習を行う。	・教育の情報化推進リーダー，ICT支援員を中心に，教職員のICT機器活用の技能を高める。 ・3年生以上は，各教科の単元の中で可能であれば，タブレットを用いた授業を行う。 ・外部講師を招き，情報モラルに関する講話を聞き，各学年の実態に応じた指導をする。	B	・ICT機器操作に関してわからないことがあると支援員にその都度質問し、ICT機器活用の技能を高めることができた。 ・3年生以上は各教科でタブレットを用いて授業を行った。 ・情報モラルに関する授業はビデオなどの教材を使い行うことができたが、講話を聞くことはできなかった。	・来年度は、講師を招き、情報モラルに関する講話や研修を行うことで、教職員・児童・保護者のICT機器に関する教養を高めるようにする。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
運営学校	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	教職員の連携促進 長時間労働の解消	・学校運営を組織的に行い、業務の効率化と分散化を図る。 ・超過勤務時間が月45時間を超えないように在勤時間を意識づける。	・指導部会を中心として、行事・企画を精選し、行事や会議の精選・効率化に努める。 ・優先順位を考えて効率的に業務を行う意識を全職員で高め合う。	B	・指導部会を中心として行事・企画の検討を事前に行うことで、全体での提案がスムーズになり、会議の効率化となった。組織的に活動しやすかった。 ・会議の縮減により、児童と向き合う時間や放課後の打合せができた。 ・日々の施錠時刻設定を行い、定時退勤日を金曜日に設定しているので徹底を図りたい。	・行事の精選、効率的で意義ある運営に努めながら業務改善を行い、退勤時刻を視野に入れた業務遂行における個人の意識の高揚に努める。
教育活動	○幼保小中連携教育	幼保小中連携教育の充実	・合同研修会や連絡会、参観などにより、児童生徒間、職員間の連携を深め、幼保小中の移行がスムーズに行くようにする。	・中原中との合同研修会やマナー検定などを実施し、児童生徒理解や学力向上についての情報や意見交換を行う。 ・授業参観の案内を幼稚園や保育園、中学校にも届け、小学校へ出向いてもらう機会を増したり、こちらから参観したりして、相互理解を深める。 ・5年生と幼稚園との交流行事やお便りの交換、新1年生との交流を行う中で連携を深める。	B	・中原中学校との合同研修会やマナー検定(今年度は、小6と中1)などを実施し、児童生徒理解や活用力向上についての情報や意見交換を行うことができた。 ・中原小学校の公開授業を中学校から見に来てもらい、研究会にも参加してもらった。また、中学校の授業を見に行くことができた。 ・学期に1回ずつ中原幼稚園と風の子保育園の先生と情報交換を行った。 ・5年生と中原幼稚園生との交流で、5年生は最上級生になる自覚が芽生えてきた。幼稚園生にとっては、小学校生活への期待が高まった。	・児童生徒の理解や職員間の連携をより一層深めるために、合同研修会をどんな内容で実施するのか、限られた時間内で研修の質を高めるための内容の精選について事前に話し合う必要がある。 ・幼、保、小、中での情報の共有化を定期的に設定する。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

各領域の重点目標に向かって全職員一丸となって1年間取り組んできた。保護者や地域の方の教育活動に対する理解と協力により、行事や学習活動が充実しており、児童が楽しく通える活気あふれる学校となってきている。学習、生活の面において児童に良い影響を与えていることが児童や保護者の意識調査からも確認することができた。昨年度から活用力向上事業の県の指定を受け、算数科の授業改善にむけて研究に取り組んでおり、自ら学ぶ態度や対話活動で友達と共に学ぶ意欲が高まってきた。しかし、各項目における取り組みで一定の成果は見られたものの、課題も明らかになっている。この課題を全職員や保護者、地域の方と共有しながら、次年度はさらに効果的な指導の在り方を探り、実践していきたい。特に、心の教育と合わせて、児童の学力向上に向けた取り組みをさらに推進していく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目